は岩西，天柏原地区が該当すると思われる）と農耕地そのものの性格を失い，他産業に利用される方向（高師原，大清水地区）があろう。そして，更に遠い将来に於いては，開拓地という一過程を経た，内陸工業地帯と化すであろう。

他開拓地との比較を行いえなかったので断定はできないが，低暖地，都市近郊の開拓地として，その要素を非常に敏感に反映している，地域ではなかろうか？

中種子糖業の地理学的考察

板　垣　若　葉

卒業論文のfieldの決定に際しては，かねてから，一度調査を行いたいと希望していた島岐を取り上げ，それも未知のものを求める興味心から，東京からなるべく離れた，それでいて交通事情も特別に悪くない種子島を選定した。春休みに，南九州一周旅行をかねて，種子島の予備巡検を行ったが，その時は，私の郷里を振り出しにし，また南種子をfieldにした菊川さんの郷里熊本に中継したこともあって，それほど遠いとは感じなかった。しかし，夏休み，いよいよ本格的な現地調査に出発する段になると，もう一度来ることを期待できない精神的緊張と，時期的にも台風シーズンの始まる直前であったことからも，現地への出発が億劫にも，また重荷にも感じられないこともなかった。このように，field地域が再調査の不可能な遠距離にあることは最初から覚悟はしていたものの，結果的みると，その調査にあたってはかなりのhandicapを持っていたこととは否めない。もともと現地調査に十分馴れていないundergraduateの段階においては，一度の現地調査で全て調べつくせるものと考えること事体大きな誤りであり，9月，10月以降，遅まきながら，ようやく問題意識が芽生えてきた時には資料不足に悩まざるをえないという羽目に陥ったのである。このような事実からも，私の論文は糖業の概論的色彩が濃く，現地を十分に反映させた，中種子の糖業の地域性を把握するという地理の主目的を達成するまでに至らなかったのは，まことに遺憾のかぎりである。

しかし，反面，必ずしも学問的とは云い難いのではあるが，何処でも飛び歩ける度胸がつき，また，島岐の生活を実際に海を渡って体験を通して知り得たことは，些か無謀ではあったが，貴重な，また楽しい思い出としていつまでも残されることと思われる。

中種子は種子島の中央部に位置し，面積140 Km²，人口20,300人，東西

22 km の細長く，頸状にくびれた地域である。種子島は琉球孤の外縁部に位置する弧状列島の一つであり，第三紀の水成岩を基盤とした海岸段丘地形が島内各地に広く分布し，特に，中種子にあっては，谷底平野の発達がみられず，耕地の79%は台地上の畑地によって占められ，島内では最も畑地農業の卓越したところである。また，中種子は，人口の割に耕地面積が広く，一戸平均1.3 ha を持つが，実際には畑地が大部分を占め，近くに市場を持たず，また，台風の常襲地である自然的制約から，さらに，歴史的にも文化の遅れた後進地域であることも原因して，粗放的な畑地農業が農業経営の基盤をなしている。それは，一つには広大な耕地のわりには機械化の遅れている事実からも，また低位な農家所得からもうかがえる。

しかし，このような，低位な段階にとどまった中種子農業も，近年，糖業の著しい伸長から，蔗作農家が増加し，また，甘蔗の作付面積が急激に増大してきている。従来，種子島にあっては黒糖生産が300年もの間続けられ，農家の現金収入源として，かなりの重要性を持ってきたが，その作付面積は昭和28年の1.5反から昭和36年3.3反へと増加し，従来の甘藷，陸稲，菜種子を主とする収益の低い作物から，この地域にあっては，水稲と共に，最も利益のあがる甘蔗への転換が認められる。なおこのような，蔗作の著しい上昇をもたらすものに，従来の黒糖生産から，需要の大きい分蜜糖（粗糖）生産へと転向したことがあげられる。

中種子においては，蔗作の急速な増大とともに，今まで自給と販売をかねて，各種の作物を栽培してきた農家も，今日では，徐々に蔗作専業農家へと転向し，従来の低位は粗放的農業から，商品化の進んだ合理的な農業経営へと変化しつつあることがうかがわれる。

ところで，中種子の糖業は，熱帯地の糖業と比較しても明らかなように，不利な自然条件の上に立地したものである。それは，砂糖という物質本来の特殊性から，一概に損得の経済法則ではわりきれない事実と南西諸島の経済開発には甘蔗をおいて考えられない二つの事実から国家による保護政策がなされているがためであり，この上に立って始めて中種子の糖業の性格が理解される。

実際，中種子にあっても，糖業によって，地域の経済開発を計ろうとする意気がめざましく，会社，農協，役場，農家は密接に結びつき，町をあげて糖業に邁進している姿が方々で見受けられた。このような，中種子糖業の姿は，本土の糖業が衰退の方向を持つのと対象的であり，また，日本の糖業地としても重要な地位を占める奄美の糖業が原料不足に悩む実情と比較しても

明らかに，中種子の糖業は最も順調なのびを示しているといえるであろう。

以上，中種子糖業の地域経済に与えた影響および，その中に占める地位，また，中種子糖業の性格をもって，このたびの私の論文の中心テーマとした。

南種子町の地誌

菊川淳子

卒業論文を作成するにあたっては，大学に於て学んだ地理学の総復習を通して，できる事ならば〝地理学の本質〟を把握する機会にしたいと考えた。

地理学はしばしば〝垂直に立並ぶ諸科学を水平に切ったその断面〟に例えられる。テーマに〝地誌〟を選んだのは，その諸科学の一部である系統地理学について学ぶ機会の多かった四年間を顧み，その成果を集積し，再構成し，解釈を与えるコログラフィーとしての地理に，より多くの興味を感じたからである。〝地誌〟を書くにあたって，必然的に問題になる地域の設定は，地誌が明らかな方法論を確立した〝科学〟の地位にまで昇華していない地理学の現状では，あえてこれを問題にしない方が賢明だと考えて，離島の種子島をフィールドに選んだ。

しかし，水圏によってある程度まとまった地域を構成している種子島も，均質的にとらえるには，あまりに多様性があり，その約3分の1を占める南種子町が厳密にはこの島を代表するところとはならなかった。

地誌をまとめるにあたって，特に，次の諸点に留意した。

1．地理的環境を構成する諸要因を，人間の経済生活からみた価値判断をもって尺度とする。（即，この地域であれば農業が主要産業であるから，自然環境でいえば，農業を大きく支配する気候，地形，地質がとくに重要となる。）

2．地域の性格を，その属するカテゴリーの中で普遍化して考察する。（即，この地域では，島として他の日本の離島の中に占める位置を明らかにする。）

3．地域のもつ問題点を明らかにする。（現実をありのまゝ研究対象とする地理の場合，地域の問題点にぶつかるのは必然的な結果であるが，人類福祉に貢献するという科学本来の使命に還元して考えても，これが意識的になされなければならないと考える。）

以上，当初の考えをなるべく具体的に網羅すべく，全体の構成を大きく三つにわけて次の様にした。

Ⅰ．種子島概況

Ⅱ．南種子町の地誌